



市民フォーラムで1日限定「まちカフェ」

市内のNPOを中心とした市民協働フェスティバルに900人を越える参加者



2011年1月30日の日曜日、市民フォーラム全体をつかっのイベント、市民協働フェスティバル「まちカフェ！(まちだ地域活動カフェ)」が1日限定でオープン。市内のNPOを中心に72団体、のべ950名の参加がありました(主催側のネットでの発表による <http://machi-cafe.org/>)。NPO法人れんげ舎の瓶詰めプリンの販売をはじめとする各種団体の物販出店から、真光寺川を清流にする会、NPO法人町田すまいの会、mintaka、じゃおクラブ、町田市少年少女発明クラブといった市民団体・地域活動団体がブースや展示で参加し、来場者との、また団体間での交流を深めました。

ツイッターやフェイスブックを使ったイベント広報は市民活動をどう変えるのか

今回のまちカフェのひとつの特徴は、新しいコミュニケーションメディアとして浸透著しいツイッターやフェイスブックを活用して、事前にイベントの広報活動がおこなわれた点であると言えるかもしれません。当日もNPOや地域活動にツイッターを活用する講座が設けられるなど、対面での人間関係を重視してきた市民活動のなかに新しいツールがどのように根づくのかを考える1日でもありました。

90号目次

市民フォーラムで1日限定「まちカフェ」	1
渋谷さんの市民精神を活かそう	佐藤 勲 2
故渋谷謙三氏を悼む	藤倉 忠夫 3
町田駅周辺そぞろ歩き	湯浅 起夫 4
「町田の紙上個展・お宝紹介」シリーズ:4	7
事務局だより・編集後記	8

渋谷さんの市民精神を活かそう

町田まちづくり市民会議 会員 佐藤勲

人はあっけないかたちでなくなるものだなどの思いがします。少し前までは、喧々諤々とみんなと色々な話題で語り合っていたのにです。

渋谷さんとは都市マス市民版（マザープラン）の道路・交通部会とゴミ部会で一緒になり、それぞれメンバーで議論し、これからのまちづくりの理念や具体的政策の提言づくりをしました。また、おしつまったところで市民参加部会には横断的に皆が出て議論しましたが、そのとき「まちづくりは市民が主人公でなければならない」との理念をその理由を含めて主張されたのが渋谷さんで、皆の共感もあり、文案の取りまとめも渋谷さんにやってもらうことになりました。渋谷さんには「23万人の個展」や「歩きながら考えるまちづくり」などの市職員時代からの経験や考え方の展開があり、市行政と市民の両方の立場がよく見える人だったので、我々もときに苦笑したり共感したりして議論がすすみました。

マザープラン提出後、会の再発足をめぐって議論したときも、市の施策展開の検証をしつつ、われわれも積極的に行動面でも情報発信面でもまちづくりにかかわってい



2009年7月28日(火曜日)

町田におけるゼロ・ウェイストの取組みを取材する

フランス国営放送のクルーを前に

市マス・ワークショップなどはいずれも市と市民との協働といえる作業で、渋谷さんのはたらき抜きには成功しなかったでしょう。渋谷さんも最後まで呟いていたように市政を本当に変えるのは市民だが、それは本当に難しいことだということです。何べんも裏切られてきている述懐を残したままで、渋谷さんは亡くなったのだと思います。

さいわい、渋谷さんの執念とも言うべき会報が健在で、また学べる遺産もあるので、市民会議は町田で重要な存在意義をもち続けなければなりません。

故渋谷謙三氏を悼む

日曜の会 会友 藤倉 忠夫

正月、大橋成夫さんからの年賀状に、予想もしなかった渋谷謙三さんの急逝の知らせが書き込んであり、大変驚きました。まずは、唯々ご冥福をお祈りするばかりです。大下革新市政のもと、日本地域開発センタープロジェクトメンバーとして企画した、湯布院町のまちづくりで有名な中谷健太郎氏を招き、町田第一小校庭で大鍋を囲んで、湯布院料理？を楽しむユニークな市民参加パーティーがありました。それに参加した時初めて謙三さんの姿に接したと記憶しています。

その後、今は亡き薬師寺さんの主唱する「町田フォーラム 21」の立ち上げに謙三さんは尽力し、そのコアメンバー作りに、当時日曜の会の事務局をしていた私にも声がかかり、「町田フォーラム 21」以降は「市民ネットワーク会議」、「ワイワイ祭」、「まちネット」と、私が平成8年に世田谷に引っ越すまでの長い間、謙三さんとの厚い市民運動の交流がありました。

謙三さんが関わる夫々の会の幹事会、準備会では自由な意見交換の場で、白熱した議論が闘わされ、彼の原理原則に基づく持論は妥協を許さず、曖昧になりがちな議論の流れを正す反面、現実的な状況より遊離する場合など、私も意見を曲げず、お互いに激論を交わす論敵でもありました。

謙三さんのユニークな「地方公務員・場生松五郎物語」から始まる謙三さんの行状記は、数々のまちづくり行動や、出版物、論評、講義録で示され、市民運動史に名を刻まれることでしょう。しかし、ホームページを見るとこれらの輝かしい活動歴の裏に、「KENZOの面白夢半分」と本音を覗かせるような皮肉な表現で自らを語る一面もあります。それと同じニュアンスの表題、20回連載の「まちづくり 50年・私の幻燈譜」には何が語られているのか興味があります。

そこには恐らく、今は故人となっている・向坂正男・石川国作・薬師寺光明・浅川利一・大田昭雄・等諸氏との交流が語られているのではないのでしょうか。是非読ませて頂きたい。「面白夢半分」であっても、その夢を語り続ける情熱は終わることなく、あの世で待っている皆さんにも、又その議論を吹っかけているのかもしれない。

ここに、衷心より哀悼し、ご冥福をお祈りいたします。

2011・01・22

町田駅周辺そぞろ歩き

湯浅 起夫

東京での「地方都市的な再開発」がなされた所を「郊外」というのであれば、町田はまさに東京の郊外の条件を満たしている所です。JR 横浜線と小田急線が交差するこの地域に、昭和 33 年、近隣町村が合併して町田市が誕生。戦後の高度成長期の昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて、都心に通うサラリーマンのベッドタウンとして、大規模団地を中心にした住宅開発が行なわれました。鶴川団地、山崎団地、木曾団地、藤の台団地、境川団地、小山田桜台団地、高ヶ坂・金森その他多くの大規模団地ができ、民間デベロッパーによる宅地開発によって、マンション、アパート群や戸建ての団地群が数多く造られ、町田は成長してきました。大規模団地は、明るく文化的な生活環境で、水洗トイレ、ガス風呂、ステンレスの流し台を完備した、当時としてはモダンな造りで、住宅に悩む若い人たちの憧れの的になったものです。団地の中には、商店街や郵便局、図書館から小中学校も増設され、活気あふれるニュータウンでした。昭和 40 年代には、町田は全国で一番の人口増加率を記録しました。町田市発足当時、人口 6 万人だったのが、現在は 42 万人になっています。

さて、前置きはこれくらいにして、まち歩きを始めましょう。JR 町田駅と小田急町田駅をつなぐペDESTリアンデッキ（歩道橋兼歩行者道路）に立つと、下は幅の広いバス通りで、まさに車の洪水です。周囲に目をまわすと、町田市自慢の駅前再開発地帯で、大型商業施設が見渡せます。



まず、小田急町田駅前には、小田急百貨店、町田モディ（旧大丸）、丸井。JR 横浜線町田駅には、ルミネ、その向かいには町田東急ツインズ、109 があり、さらにユニクロ、ドン・キホーテほか、市民に必要なものはほとんど間に合います。ここまで駅前に揃っている光景は他に類を見ません。

この駅前については、これまでいくつかの発展段階があります。まず、高度成長期、団地が林立した 60 年代後半から 70 年代に、小田急百貨店、大丸、ダイエー、緑屋といったデパートや量販店が進出しました。その後、80 年代頃に、東急百貨店、丸井ができ、バブルがはじけた後、90 年代からは、周辺地域の新百合ヶ丘、相模大野の開発と発展が進み、また、国道 16 号線のロードサイドに立ち並んだ大型の量販店が家族連れを呼ぶようになり、町田の商店街は元気を無くしていきました。この時期、大丸、東急百貨店（東急ツインズになる）、ダイエーが撤退、緑屋、十字屋、長崎屋といった量販店が倒産しました。

新し物好きの東京人の熱が冷めたのか、21 世紀に入ってから人びとは駅前回帰を始めてきたようです。しかし、好調なのは百貨店ではなく、ユニクロ、ヨドバシカメラ、ドン・キホーテ、ダイソーといった生活密着型量販店です。こういう駅前の光景は、金太郎飴のように吉祥寺、柏、立川といった他の東京近郊の駅前と似たり寄ったりで、特に「町田で買いたい」という気持ちにはつながりません。都市としての景観も、素晴らしいとはとても言えません。

しかし、このペDESTリアンデッキを降りて、町田の中心市街地へ出ると、町田の印象は一変したものになります。ここには大型店といっしょに、明治、大正、昭和の始め頃から続いている地元の商店があって、結構にぎわっています。

メインの商店街のひとつ、町田中央商店街を歩いてみましょう。昔ながらの喫茶店は数少

なくなり、代わってドトール、スタバ、ベローチェ、ニューヨーカーズカフェ、タリーズといったコーヒーショップやジーンズショップ、ブックオフ、ラーメン屋、回転すし、パチンコ屋、靴屋、かばん屋、衣料品店などが並んでいるのを見るかぎりには普通の繁華街ですが、ところどころに地場の古い店が頑張っているのです。

なまこ堀の土蔵づくりの老舗で、製菓、製パン材料を商う富沢商店、乾物屋の河原商店、昔ながらの和菓子の中野屋。ここの「七国団子」は、素朴なよもぎの草団子で、名前の由来から七国山で採れたよもぎで作ったのかなと想像しながら、きなこをまぶして食べたがとてもおいしい。値段も10ヶほど入った包みが315円とリーズナブルなのがうれしい。

さらに、すこし歩いていくと肉屋の守屋商店。ここの売りは、明治時代から続いている町田の名物「焼き豚」です。昔は数多くあった焼き豚屋も、今は守屋商店ただ一軒のみ。この「焼き豚」は、中華料理のチャーシューとは違い、桜のチップでじっくり焼き上げた、いわゆる焼く豚です。

この守屋商店の豚は、高座豚といって、明治の始めにイギリスから入ってきた、中ヨークシャー（白豚）という種類とバークシャー（黒豚）という種類の小型の豚です。どちらも小柄で小さな耳がピンと立ち、鼻はしゃくれ、愛嬌のある顔をしていました。戦前の漫画「のらくろ」に出てくる豚勝將軍のイメージです。肉質も赤肉に霜降り状の脂肪が入り、日本料理用に改良された豚でした。

現在私たちが食べている豚は、戦後アメリカから輸入されたランドレースとかハンプシャーといった大型の豚で大きな耳は垂れ、鼻は尖っています。ちょうど西遊記に出てくる猪八戒のイメージです。肉質はハムなどの加工用に改良されたので赤肉主体です。ダイエットされる奥様方に人気があり、短い期間に市場に出せるほど大きくなります。

従来の日本の豚は、残飯を食べて大きくなりますが、戦後輸入した大型の豚は、残飯を食べず、高タンパク、高カロリーの配合飼料を食べます。このエサはアメリカからの輸入で、戦後に大型の豚を輸入した農家は、それからずっとアメリカからの配合飼料を輸入することになったのです。いま、ごみ問題が町田でもおおきな問題となっています。このごみの半分以上は生ごみ、すなわち家庭からの残飯、大根等の尻尾やいもの皮、レストラン、スーパー、コンビニの売れ残りなどの残飯です。日本の豚を復活させて、残飯を処理させたら一石二鳥ではないですか？多少小型でも、成長が数カ月遅くても、生ごみ処理にかかるロスと費用を考えれば安いものです。

話がだいぶ脱線しましたので、もとに戻します。このように中央通り商店街は、新旧織り交ぜての店に、連日、たいへんな人で賑わっているところが、普通の郊外とは違うのです。まちを歩いている人たちも、主婦、学生、サラリーマン、リタイア世代の高齢者と幅広く、市内や近郊に桜美林大学、青山学院大学、国士舘大学、和光大学といった大学が多くあり、中央通り商店街にはこういった学生のコンパやサラリーマン向けの安い居酒屋、ワタミ、魚や一丁、白木屋、笑笑など数多くあり、若い人向けのジーンズショップも充実。新宿や渋谷に出なくても町田で何もかも間に合う感じです。

ところでこの中央通り商店街は、再開発でできた商店街ではなく、古くからの商業地だったという歴史があるのです。古くは鎌倉街道の中継地であり、明治の産業振興時代は、絹糸の産地である信州・山梨から八王子、そして横浜の港に至るまでの「絹の道」の中継点でもあり、当時から「2・6の市」で賑わっていた商業地だったのです。

この中央通り商店街の中ほどに、町田駅前通りに入る細い路地があり、アーケードになって30軒ほどの店が並んでいます。仲見世商店街で、昼間でも薄暗く、人がすれ違うのがやっとなという狭い道の両側に魚屋、金物屋、若い人たちの手作りファッションの店もあり、カレーショップやメンズエステの店があつたりと、何か滅茶苦茶なそして怪しげな商店街です。戦後は闇市があつたところだそうで、アメ横を小さくしたような、下町的なレトロな商店街

です。入り口にある大判焼の店は、週末には行列ができる人気があり、事実、大判焼の中身はあんこで私のメタボな腹のようにいっぱい膨れています。このような商店街が、駅前の大型商業ビル群や中央通り商店街とはまた違う、「うさん臭い」商店街として、町田を一段と面白くしています。

ここで、JR 町田駅南口、いわゆる駅裏と言われているところにまいります。ここは町田の「表の顔」からは一変した、妖気の漂う街です。この場所はかつての青線地帯で、すこし前まで木造の売春宿がありました。東京都の風俗浄化作戦の影響を受けて、数年前から取り壊しが進み、今では建物はほとんどありません。その跡地がコインパーキングに変わっていますが、いずれマンションに変わると思います。旧青線地帯というのは、もう御存じない方も多いと思いますが、昭和 32 年の売春防止法施行以前に、非合法で売春が行なわれていた地域の俗称で、特殊飲食店として売春行為が黙認されていた地域は「赤線」と呼ばれていましたが、「青線」では特殊飲食店ではなく、一般の飲食店として営業許可を受けただけの店が売春を行なっていました。町田の駅裏は、今でもこの「青線」の色合いを残して、すこし怖いところというイメージを拭いきれません。橋のあたりにケータイを持って何となくたむろしている御姫様はプロで、今はラブホテルが営業場所になっているようです。昼はともかく夜になると付近の様子はさらに一変するようです。

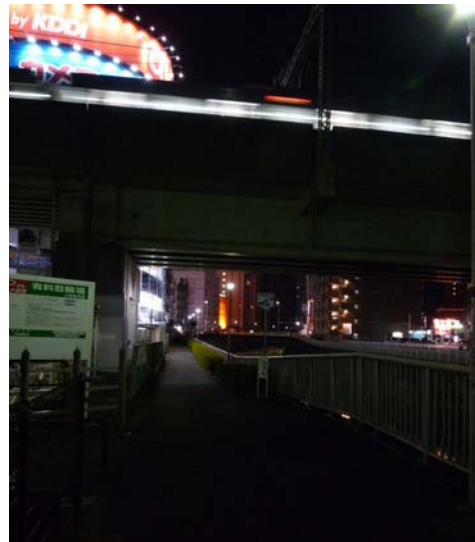
JR 町田駅南口を出ると、ヨドバシカメラの前に境川が流れていて、川の両岸にラブホテルと結婚式場、そしてマンションが凹凸に建ち並んでおり、最近では老人専用の賃貸マンションもできています。ラブホに結婚式場に教会、そしてマンション、老專賃と、人の一生の流れを表現するかのように見事に並んだものだと感心してしまいます。橋のあたりにたむろしている御姫様のそばを、買い物袋をさげたお母さんや少年といった市民が、普通に通っているのにも驚きで、なんとこの街だろうと自分の街ながら表と裏の顔の違いとその同居に呆然としたものです。

といったところで、町田駅前のまち歩きは一応終わりにして、ここらでちょっと一休みということで、小田急町田駅南口に最近出店した「宮越屋珈琲」に入りました。ここは店が広く落ち着いた雰囲気の中かで本格コーヒーが味わえ、店内に流れる BGM はジャズが中心。特別にオーダーした椅子とテーブルはまさに大人の空間です。

ほっとひと息入れて、珈琲をすすりました。そしていま歩いてきた町田の駅周辺の街並みをふり返ってみると、私が町田に来た当時は、緑が多く空気もきれいで、周囲にのどかな田園風景が広がり、そのなかに開発されたばかりの大規模団地が白く輝いていました。まだ小さかった息子が夏休みになると夜明けを待ち切れずに団地の誘蛾灯に走り、クワガタムシやたまにいるカブトムシを採りにいきました。時々、タヌキが車にひかれたという新聞記事も出たものです。

しかし、いまや北部丘陵の一部を除いて、森も雑木林もなくなり、クワガタムシやカブトムシもいなくなり、我が家の蛍光灯のまわりにはゴキブリが飛び回っています。タヌキの居場所もなくなったようです。田や畑の田園風景は消え、道路は車の渋滞です。駅や中心市街地は芋の子を洗うような人混みです。

「大きいことはいいことだ」とばかり、高度経済成長の先端をきって突っ走ってきた町田は、もう郊外ではなくなり、立派に都市に、それも南多摩の中核都市になったのでした。



小田急線の高架下に入った
ヨドバシカメラ裏の境川沿いの夜の様子

町田の紙上個展・お宝紹介 シリーズ：4

(社) 発明協会 町田少年少女発明クラブ指導員 中尾高史さん

社団法人発明協会は、1974年から少年少女発明クラブをスタートさせ、今日では全国に200以上のクラブがあり、たくさんのお子どもたちが参加しています。全国少年少女チャレンジ創造コンテスト(チャレコン)の2010年度の課題は「モーターとゴムで動くハイブリッドカー」。町田の少年少女発明クラブからも力作が生まれました。今回の紙上個展では、この発明クラブで指導員としてお子どもたちの指導に当たられている中尾高史さんを御紹介します。中尾さんは厚木の機械メーカーにお勤めで、千葉のご出身。12〜3年前に桜美林大学の近くに越されたそうです。まちカフェのブース出店で慌ただしいところ、お時間を割いていただきお話をうかがいました。

理系の子どもをひとりでも多く育てたい

工作をやってみたい。ご長男が小3の時、広報まちだに載ったクラブの案内をみて、そう言ったのが最初の参加のきっかけだったそうです。中尾さんご本人も工作はもともと好きだったそうですが、最初の1〜2年はお子さんだけが参加し、父兄としての付き添いのみだったとのこと。3年目にクラブのほうから指導員として参加されてはとの話があり、現在に至るそうです。お仕事との両立はたいへんではありませんか、との質問に、「指導員の方々はいろいろなキャリアをもった方がいて、視野が広がりますし、いろいろな人と出会えるのは息抜きのひとつになっています」とのことでした。お子どもたちの考え方は仕事のアイデアにもつながり、発想の参考にもなっているとのことです。なによりも、理系の子どもをひとりでも多く育てたい。笑顔で中尾さんはそうおっしゃいました。



町田少年少女発明クラブの課題と抱負

発明クラブでは現在、指導員の不足という問題もあるものの、活動のための場所がもっとあれば、という思いを抱いていらっしゃるそうです。現在は約70名の子どもたちが発明クラブに参加していますが、実際の希望者はもっと多く、工作設備の問題などもあり、希望するすべての子どもたちを受け入れることができていないのが現状だそうです。「やってみたいという子どもたちに機会を与えたい」、そう中尾さんは話されました。他地域の少年少女発明クラブのなかには企業の支援を受けているところもあり、そうしたところでは施設にも余裕があるなど利点もあるようですが、あくまでもボランティアをベースにしてやっていきたいとの想いも語っていただきました。働き盛りの男性の地域参加がまだまだ数少ないなか、中尾さんは今日も未来のエンジニアを町田で育てています。(取材・記事構成：『まちづくりの環』編集部 井上弘貴)



今回は柿原ユキ子副議長のご紹介です。

事務局だより

次回定例会と3月の総会のおしらせ

・3月の定例会は3月4日(金曜日)

13:00～より中央公民館ロビーでおこないます。次回の定例会では、3月19日の土曜日午後に町田デザイン専門学校本館にて開催を予定しています。2010年度総会について話し合います。総会の詳しい御案内は次号にて掲載をさせていただきます。ホームページ上にも詳細が決まり次第、掲載いたします。

町田まちづくり市民会議 HP

<http://www.machida-machizukuri.com/>

——会費のお願い——

2010年度の会費が未納の方は、下記にお振込みをどうぞよろしくお願ひします。『まちづくりの環』はひろく町田市内のまちづくりにかかわるみなさまにお配りをしてしていますが、当市民会議の安定的な活動継続のため、ぜひ多くの方々に会員になっていただけましたら幸いです。年会費は1,000円です。会報の講読会員としてのご参加も可能です(会計担当：柿原)。

口座：「ゆうちょ銀行」 10160-67915431

名義：町田まちづくり市民会議

会員／会友のみなさまにご案内

～会報はお手元に届いていますでしょうか～

これまで『まちづくりの環』印刷版の発送業務は渋谷事務局長が単独でおこなってまいりました。渋谷事務局長の逝去にともないまして、この作業を新しい事務局体制のもとで引き継ぐことになりましたが、発送者の方の正確なリストを渋谷事務局長が遺さなかったため、お手元に本会報が届いていない方も少なくないことと存じます。お知り合いに会報が最近届いていない方がいらっしゃいましたら、編集担当の井上までご一報ください。新規会員にかんするご相談も併せてお受けしています。

(hiro_inouye@yahoo.co.jp)

編集後記

今号では巻頭に、先月30日におこなわれた「まちカフェ」について大きく写真つきで掲載をしました。今回のイベントをきっかけに、市内のさまざまな団体間の新しい交流も生まれたようでした。ある市民個人や団体がしている活動をべつの市民個人や団体が知らないということは、とてもよくあることです。市民と市民が協働するための橋渡しの機会や場所に気を配ることも、行政の大切な役割だとあらためて思う今回の「まちカフェでした」。サポートとは傍観や後見ではありません。

◇ ◇ ◇

1月21日付の朝日新聞「ひと」欄にて、まちだ市民情報センターと有志が発行した『議会のトリセツ』が紹介されました。その後の反響はたいへん大きく、全国各地からの注文に増刷を急いでいるとのこと。昨年の12月議会において町田市自治基本条例案が市議会で否決されるという結果になりましたが、町田の市民活動が新聞で取り上げられたことを契機に、どのような自治基本条例を私たちは求めるのか、多くの市民が自分のこととしてとらえるきっかけになればと思います。

◇ ◇ ◇

みなさまからの渋谷事務局長への追悼文は次号でも引き続き掲載を予定しています(H.I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報

2011年2月9日第90号発行

発行者 佐藤東洋士

編集責任者 井上弘貴

事務局 常盤町桜美林大学内

TEL 042-797-6947

E-mail hiro_inouye@yahoo.co.jp